大瀬川B遺跡の須恵器壺

経塚に再利用された須恵器壺

平安時代の中ごろ、相次ぐ天災や戦乱などから世情不安が高まりました。また仏教の歴史観では、釈迦の入滅から2000年経過すると、仏法が大いに衰え、退廃し、乱れた世相になるという末法思想が語られました。日本では永承7年（1052）が末法元年とされ、貴族や地方の有力者たちは、経典を未来に伝えようとして、経塚を盛んに築きました。岩手県でも、12世紀平泉藤原氏の時代を中心に多くの経塚が築かれ、花巻市内では丹内山経塚（東和町）や、高松山経塚群（高松）などが知られています。

大瀬川B遺跡は、街道を見下ろす丘の先端に営まれており、東北自動車道建設に伴い、岩手県教育委員会により発掘調査されました。３基の塚が東西に並んで築かれて、西側の1号塚の中心は、川原石を組んだ小さな石室になっています。石室底面の平たい石の上には中国北宋銭の至道元寶が置かれ、その上に須恵器の壷が設置され、上部を川原石で覆い、さらに土で被覆していました。壷の中には何も残されておりませんでしたが、塚の構造は経塚であり、経典の容器として使用されたものと推定されます。この須恵器壷は平安時代後期の11世紀ごろの製品と考えられますが、やや古い壺が12世紀の経塚に再利用されて、現代まで残されました。なお隣の2号塚と周辺からは、12世紀の常滑三筋壷1個体分の破片が出土しています。